

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）個人研究2025年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職名	氏 名		
	文学部・教授	阿部善彦		
研究課題	東方・西方教会における神化思想―受肉論・救済論にもとづく両教会の共通理解の探求―			
研究期間	2025 年 度			
研究経費 (1 円 単 位)	(支出金額) 480,000 円 / (採択金額) 480,000 円			
研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフは使用しないこと。)				
当該研究の研究目的を含むこと。 【以下、報告書全体について】他の研究分野の委員が評価することも想定し、わかりやすく記載すること。				
本研究は、キリスト教思想史の視点から、東方・西方キリスト教会の分断を決定的なものとしたとされる根本問題を取り扱う。本研究が取り上げる「神化思想」における 14 世紀以降の東西教会の神学的分断は、聖霊論に比べると、問題解決に向けた研究者の積極的な関心をほとんど集めることがなく、今日に至るまで、両教会の互いに対する排他的正統性の主張と一体化したままである。そこで、本研究は、「神化思想」による両教会の相互理解の可能性を探る。				

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)
[神化] [教父] [受肉]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか (できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果 (経過) を達成できた (できなかった) と考えられるのか
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。
- ・どのような点において、当該研究分野の学術研究推進の高度化に寄与できたのか。

本研究が目指す問題解明は以下の三点によって構成されている。

- (一) まず、〈受肉による救い〉の観点から「神化思想」が両教会に共通の信仰理解であることを再確認する。
- (二) それをふまえて、「神化思想」における両教会の相違を、教父文書、神学諸文献にもとづいて解明する。
- (三) そのうえで、それらの「神化思想」における相違を超える、両教会の共通の理解基盤を解明する。

研究成果は以下のとおりである。(一) においては、〈受肉による救い〉の観点から「神化思想」の成立過程が解明される。つまり、初代教会より〈イエスが神の子であり、救い主である〉ことをめぐって六世紀頃まで繰り広げられた神学論争がついに〈受肉による救い〉の教義を確立しながら終息する過程で、〈神化による救い〉(神が人となる受肉によって、人は、神と同じいのちによって生きる者とされる〈神化〉によって救われる)が、両教会に共通の正統な信仰理解となったことが解明された。(ただし、非正統的とみなされたグループでは独自の展開があり、その後の東方・ビザンツ神学における多数派による正統主義の問題は今後の課題となる)

(二) においては、この「神化思想」が、東方教会ではゆるぎなく保たれる一方で、西方教会では、14 世紀以降に急激に非主流化し、ついに異端弾圧の対象にまで貶められるという、両極的な思想史的事態が解明された。まず西方教会の神化思想では、愛による神との一致が強調される傾向があり、この点で独特の神化思想が展開する。つまり〈人間は神を際限なく渴望し全身全霊で愛し求める存在〉であり、その究極的な渴望と愛が充足され真実の安らぎを得るのは〈神との完全な一致〉においてであるから、そのためには、〈人間は自然本性的な限界を超えた神のいのちによってともに生きる者とされる、人間神化という超自然本性的完成が不可欠である〉とされる。このように、人間は神を求め渴き燃え上がる愛ゆえに神との一致を求め、それゆえに、人間は神化の道行きを歩まねばならないとする教えと実践の西方教会的な集大成は、11-12 世紀頃に教父的伝統を復興・刷新させた修道院神学の諸文書にその精華というべき思想表現が見いだされるが、西方教会では有名・無名の女性キリスト者による諸文書(俗語の詩歌も含む)にも、愛と神化をめぐる独自の優れた思想表現が次々と結実した。本研究は、このような西方教会独特の神化思想のあゆみにもとづいて、東方には並行する思想史的状況が見られないような、愛(意志)の強調と女性霊性の発展を、相違点として指摘することができた。

これに加えて、以下の学問論的状況についても解明を進めることができた。すなわち、西方キリスト教世界では同時期に都市で男性限定の教育研究機関として大学が誕生し、その発展にともなって、知的構造が加速度的に変化し、「神学」がついに大学神学部で学問的営為に回収・独占された。その結果「神学」は論証的知の自明性の範囲内に自己閉塞し、超自然本性的な完成をもたらす人間神化の教えとその実践・修行は「神学」から切断・排除され、「神化思想」は人間的分際を逸脱する危険で理解不能な教えと実践・修行として異端断罪されるに至る。東方教会には見られない〈大学・神学教授による「神学」の占有と「神化思想」の断罪・排斥〉という相違点は、13-14 世紀には鮮明化し、その後の西方教会の神化思想と東方教会に対する否定的姿勢をともに決定づけ

研究成果の概要 (つづき)

るに至る。本研究は、このような西方教会の大きな歴史の転換点を、特に、マイスター・エックハルトの神化思想に対する教皇庁の異端断罪の経過によって確認することができた。

さらに、この学問論的状况を踏まえて、ビザンツ神学における神化論争の状況にも一定の解明をもたらすことができた。つまり、同じ 13-14 世紀頃に西欧的な論証知的「神学」が東方教会にも流入し、ビザンツ帝国内部で西欧的「神学」による修道靈性的「神化思想」に対する激しい攻撃がなされた。しかし、西方教会と異なり、東方教会では、大論争の末、流入した西欧的「神学」が断罪・排斥され、教父以来の人間神化の教えが、その実践・修行とともに、正統な神学として守りぬかれたことを、特に、14 世紀の東方教会の主要な神学者グレゴリオス・パラマスにもとづいて確認することができた。

その上で、東西教会の隔たりがその後どのように拡大していったかについて確認することができた。すなわち、近代以降の西方キリスト教世界の主要な神学では、神化思想が迷信的な汎神論とみなされ、これに応じるように、東方キリスト教世界には西側に対する警戒心と不信感が募る。これらの分断のプロセスについて学会、研究会をつうじて総合的に検討することができた。

(三) においては、(二) で解明した「神化思想」の排斥のあともなお、西方教会でも、非主流的思想潮流として、ひそやかに「神化思想」が保たれたことをふまえつつ、両教会において互いに整合・一致する「神化思想」があること、そこに相互理解の可能性があることを明らかにすることができた。具体的には、14 世紀以降の西方教会の思想史的状况においても、「敬虔主義」(Pietism) や「静寂主義」(Quietism) と呼ばれる非主流的・非神学的キリスト教靈性が生まれ、その都度エックハルト同様に異端断罪による忘却の闇に葬られながらも、東方教会の靈性に通じる「神化思想」を蘇らせていることが確認できた。また、それに伴って、近代以降の西方教会の神学(プロテスタント側も含む)において、「神化思想」が排斥されてきた原因を検討することをつうじて、西方教会の多数派の神学における「神化思想」の欠落が様々な問題(とりわけ、受肉論・救済論に関して)を引き起こしていることが解明された。この点の解明については、東方キリスト教においては、ウラジミール・ロースキー、また、日本の宗教思想においては、鈴木大拙、柳宗悦、井上洋治などによって繰り返されてきた、西方教会の神学に対する批判、問題提起を再検討することをつうじて進められた。

以上のことから、西方教会においても非主流派においては「神化思想」が教父以来受け継がれるキリスト教の本質的な受肉論・救済論として展開してきたこと、そして、この受肉論・救済論としての「神化思想」においては、東方教会と共有された信仰理解であることが確認されるとともに、さらには、受肉論・救済論としての「神化思想」が、諸宗教の救済論とも応答可能であることが明らかになった。

以上の研究成果は、学会や研究会で報告され、キリスト教思想研究の領域において、ほとんど関心が向けられずに放置されてきた問題に着実に解明の光を届けることになった。そして、そこから東方キリスト教研究および宗教思想研究者との協働関係も動き出し、新たな研究展開が始まることになった。

※ この(様式 2)に記入の、成果の公開を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
研究ノート「マイスター・エックハルト ドイツ語説教 102 (試訳)」(阿部善彦、キリスト教学、第 67 号、2025 年、53-74)

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
『マイスター・エックハルト 教導講話』(阿部善彦訳、ヨベル、2025 年、256 頁)

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
救済論としての神化思想 (阿部善彦、パラマス研究会・東西キリスト教神化思想研究会・合同研究会プログラム、2026 年 3 月 19 日、南山大学)

神化思想の展開可能性：柳宗悦、井上洋治に着眼して (阿部善彦、連続研究会・神化思想の根源を探る「第二部：受肉による救済と美による救い：ニュッサのグレゴリオス、柳宗悦、井上洋治の霊性・宗教観による東西神化思想の新展開に向けて」2026 年 3 月 11 日、立教大学)

エックハルトの「ドイツ語説教 102 番」：これからの神化思想に向けて (阿部善彦、連続研究会・神化思想の根源を探る「第一部：東西神化思想の源流をめぐって：神秘神学・ドイツ神秘思想の中心問題」2026 年 3 月 5 日、立教大学)

神化思想の源流を探る (序) (阿部善彦、連続研究会・神化思想の根源を探る「第一部：東西神化思想の源流をめぐって：神秘神学・ドイツ神秘思想の中心問題」2026 年 3 月 3 日、立教大学)

吉満義彦における霊性の自覚：「新しき中世」と東西神秘主義に着眼して (阿部善彦、【講演会×史料展示会】没後 80 年 吉満義彦の人と思想 (主催：上智大学中世思想研究所、上智大学学術研究特別推進費重点領域研究 (2023-2024 年度)、JSPS 科研費基盤研究 (B)「新発見資料が映し出すもう一つの日本哲学史—吉満義彦文庫と上野直昭関係資料の研究」(25K00391)) 2025 年、上智大学)

東方キリスト教研究という研究領域の可能性について (阿部善彦、東方キリスト教学会、2025 年、東京大学)

人間的理解の限界としての神化思想：西方キリスト教世界の根源的問題性に向けて (阿部善彦、日本基督教学会若手研究者イニシアティブ委員会合宿、2025 年、同志社大学リトリートセンター)